

令和元年度 奈良市立朱雀こども園 研究実践概要

園長名	鈴木 優子
全園児数	221名

1. 研究主題 豊かな心を育み、いきいきと生活する子どもをめざして
—安心して表現できる乳児から遊びこむ幼児へ—

2. 研究年度 2年

3. 研究主題設定理由

これからの子どもたちをとりまく社会は、急激な変化により、生活体験の不足から様々な技能や感性等が身につけにくいといわれている。そこでそれらの力をつける為には、子どもが生活や遊びを通して深く関わり、主体的に活動することが大切であると考えます。本園は、こども園になり2年目であり、0～5歳の一貫した保育の大切さを感じているが園児数、職員数の多さと分園であるために共通理解の難しさといった課題もある。

本年度は、昨年度の課題をもとに、0～5歳の発達をふまえ、心を育む保育を基に、子ども自らが能動的に活動する中で深く学び、豊かな感性を育めるようにとこの主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・友達と共に遊びや生活の中で環境に自らとりくみ試行錯誤しながら物の仕組みや物の様子を自分の中に取り込むといった「主体的で対話的な学び」ができるような乳児から幼児までの発達の連続性をとらえていく。

・子どもが身近な環境に興味や関心をもち、友達や保育者と共に能動的にかかわりながら一緒に遊びこもうとする力を育てる。

②研究の重点

・昨年度の課題を踏まえ、0歳児から就学までのつながった教育、保育ができるように、人事交流、子どもを中心とした話し合い等、職員相互の共通理解を図る。

・過程を大切に心が揺れ動く体験ができる環境づくりを工夫する。また、物的環境を最大限に生かす共通理解ためには人的環境が大切であるので保育者の質の向上に努める。

・子どもの深い学びのために、子どもが何に気付いたかどう工夫しているか、何をしようとしているか保育者の深く観る力を磨く。

③活動の方法 _____人とのかかわり、_____環境構成

【0歳児】 「もう1回！」 ～1月～

(ねらい) ○ 保育者と一緒に触れ合って遊ぶ。

○ 保育者との信頼関係の中で、自分の気持ちを安心して表す。

特定の保育者が丁寧に関わり、愛着関係の中で安心して過ごせるよう、育児担当制を取り入れ、一年を通してふれあい遊びを楽しんできた。子どもが保育者の膝の上に座りに来ると、抱きしめたり、体を揺らしたりして遊び、「おすわりやす」や「バスにのって」「きゅうりもみ」などの歌を保育者が歌い始めると、歌に合わせて体をユラユラさせたり、繰り返しのあるしぐさを真似たりする姿が見られた。歌が終わると、保育者の顔を見、目と目が合うと嬉しそうに笑い、指を1本立てて「もう1回やって！」としぐさで訴えた。楽しかった思いに共感し、子どもの要求に応え、満足するまでふれあい遊びを繰り返し楽しんだ。

〈反省・評価〉

安心できる環境や保育者とのかかわりの中で、1年を通して繰り返しふれあい遊びを楽しんできた。指さしや身振り、子どもの声に耳を傾け「たのしかったね」「もう1回する？」と子どもの思いを言葉にして届けるようにし、一人一人に寄り添いながら、ふれあい遊びを楽しむことができた。

【1歳児】

「ちぎちぎ」「ぎゅう」おもしろいな！～8月

(ねらい) ○保育者に見守られながら感触遊びを楽しむ。

○手、指、体で感じたことを身振りや言葉で伝えようとする。

夏に色々な素材を使って感触遊びをした。

その中で一番喜んだのは高野豆腐遊びであった。

保育者が高野豆腐を子ども一人一人に手渡し一緒に匂いを嗅いでみた。その後、ぬるま湯につけると変わっていく感触に、不思議そうな表情をする子、「やわらかい」と言う子もいた。柔らかくなった高野豆腐を保育者が指で押さえる様子を見て真似てみると、水が出てくる不思議にはっとした表情を見せたり、「ぎゅう」と言いながら押す子もおり、「お水出てきたなー」と子どものつぶやきに共感した。

引っ張る、ちぎるも「ちぎれた」「ちぎちぎ」などつぶやきながら夢中で遊んでいた。

〈反省・評価〉

初めて見る高野豆腐をじっと見ているだけの子もいたが、保育者がする所を見せたり、一緒にぬるま湯につけながら変わっていく感触を味わうことで興味をもち、持つ、嗅ぐ、握る、ちぎるなどの五感を使って遊ぶことができた。

また握ると出てくる水に「あー」と言ったり「ちぎちぎ」と言いながら夢中でちぎる子、ちぎれた！とばかりに保育者に見せにくる子など自分なりの言葉や身振りでしたことや感じたことを表す姿があった。



【2歳児】

「お野菜、大きくなったよ」 9月

(ねらい) ○夏野菜を収穫し、見たり、触れたり、匂いを嗅いだり、食べたりして五感で味わう。

○自分達で収穫した野菜で遊ぶ事を楽しむ。

9月

夏野菜の苗を植えて世話をし、野菜が実った。収穫した野菜を調理室に子ども達と持っていき、調理をお願いした。給食の際に「みんなで作ったトマトだよ」と伝えると、普段食べない子も「おいしい」と言って食べていた。また、野菜を実際に触ったり匂いを嗅いだりすると、「ツルツル」「なんか痛い」「重たい」など子ども同士で話をしていた。目の前で切り、切口を見せながら子ども達に形を聞いてみると、「まる」「つぶつぶがある！」「お星さま」など感じたことを次々に話し出していた。ピーマン・オクラ・キュウリの種を見て「これ何やる？」という声に、一人の子が「たね！！」と言い、保育者が「種やね」と応えると、他の子ども達も「種！」「種や！」と盛り上がる姿があった。野菜スタンプではオクラやピーマンばかり使う子、色にこだわる子、いろいろな色や野菜を使う子などそれぞれだったが、思い思いにスタンプを押すことを楽しみ、出来上がりを見てとても喜んでいった。

〈反省・評価〉

子ども達と一緒に土づくりから始めて世話をし、野菜に興味や関心を持つことができた。収穫した野菜を実際に食べたり、感触や匂い断面などに注目したことで、子どもが感じたことを言葉にして表現していた。野菜を使用するスタンプ遊びでも、いろいろな発見や気づいたことを子ども同士で話したり、保育者に伝えたりする姿に繋がった。

【3歳児】

「明日もしよう」 7月

(ねらい) ○身近な自然物を見たり触れたりして親しむ。

○自分の気付いたことややりたいことを保育者や友達に話す。

子ども達が育てていたアサガオがしぼんでしまい拾い集めていると、手に紫色がついて驚いた姿からこすり出しを提案してみる。すりこぎでたたくとアサガオの色がにじみ、「ぶどうジュースができた！」と嬉しそうに保育者や友達に話す。しかし、こすりつても



なかなか友達のように色が出なくて「できない」と伝えに来る。少しずつ周りのこと・子どもの姿を向けられるようになってきているので「どうやってしているのかな？」と真似られるように声を掛けていると「水入れる前にお花をグルグルするんだよ」と自分が気付いたことを話し手伝う姿が見られた。また、それぞれが作ったジュースが分かるように看板や飾れるテーブルを用意すると、ジュースやさんが始まり楽しくなり「もっとつくろう」と言う声が出てどんどん作るようになった。そんな中、しぼんだアサガオが無くなり遊べなくなる。「他に花がないかな？」と保育者と探中、しぼんだパンジーや藤の葉で試す子が出てきた。すると、違う色のジュースができて驚いたり、「このお花はできるかな？」「葉っぱは硬いからもうちょっと力がある」といろいろな自然物に興味を示しながら遊び始めた。そして、作りたい色が探せるように図鑑を用意したことで友達を誘っての材料探しも広がっていった。振り返りの中でも嬉しそうに話す子どもの姿を見て、「やってみたい」と話す子どもが日に日に増えいろいろなジュースが毎日並んだ。

〈評価、反省〉

- ・自分でできた嬉しさを周りの保育者や友達に知らせたい姿をつないでいく援助をしたり目を向けることができるように環境を整えたりをしていくことで「どうやって作るんだろう？」「もう、オレンジジュース作れるようになったよ」などいろいろな発見をしながら遊ぶようになっていった。また、子ども達たちのしていることを言葉にしていくことで周りの子どもも興味を持つようになっていった。
- ・自分で気づいたり、不思議を感じたりすることで試したい気持ちも膨らんでいったが、振り返りで楽しかったことを話す嬉しそうな様子を共有していく事でさらに、自分の思い、気づきを言葉で知らせようとする姿も増えていた。

4歳児】「カラオケしよう」 9月～11月

(ねらい) ○友達と一緒に思いを出し合いながら遊ぶ。

○話し合いの中で相手の思いを知る。



運動会で使っているCDを見つけて「この曲かけて」と伝えるA児。廊下にデッキを運び、好きな曲を流して体を動かして遊んでいた。遊んでいると楽しそうな雰囲気を感じて数人で一緒に遊ぶようになった。しばらく楽しんでいたが、一曲目が終わるころ、B児が友達に相談せず曲を変えた。それを見たA児とB児が「勝手に曲を変えないで」とトラブルになりB児が泣き崩れて話ができなかった。そこで遊びの振り返りで解決する場を作り、困った事を出し合い、思いを共有してどうしたら良かったかクラスで話し合うことにした。

話し合いの中では、他の子が「順番を決めたらいいやん、じゃんけんとか」という意見があり、遊びのルールができた。その他にも、「客席を作ったらいい」「チケットを作って渡す」など次の日に遊びを繋げるアイデアが沢山あり意欲的に遊ぼうとする姿が見られた。別の日、遊び始めた子が曲を流す順番を決めた。しかし、後から遊びに参加した子には曲の順番を共有することができず困っていた。保育者が「こんなもの使う？」とホワイトボードを用意すると、「私、字かける」と言って役割分担し、順番を書いて表示することになった。情報を共有できるものを使うことで遊びがスムーズに流れ楽しむことができ、次の曲を友達と相談して遊びを進める様子が見られた。

〈反省・評価〉

遊びの中で馴染みのある曲を準備することでじっくり遊びを楽しむことができた。その中で、トラブルが起こると自分の思いを伝えたり相手の思いに気付いたりする姿が見られ、友達を意識して遊ぶようになった。また、遊びの振り返りを通して困っていることをクラス全体で考え、友達の思いに気づき、それを一緒に考える中で他の子の意見に耳を傾けて聞こうとするようになった。

【5歳児】 「お手紙届くかな」 11～12月

- ねらい
- ・ 友だちと共通の目的をもち、工夫したり役割分担をしたりしながら遊びを進めていく。
 - ・ 文字や数字、図形等に興味関心を広げる。



11月中頃、サツマイモ堀をした芋を使って遊んでいるA児が芋の断面が「ハートになってる」といういろいろな形・大きさになっていることに気づき、保育者が紙や絵の具を用意したことで芋ハンコを押し

た便箋のようなきれいな紙を作ることができた。その日から自分たちでつくった便箋を使いお手紙ごっこが始まった。

数日後クリスマスが近づくと B 児が「サンタさんに書こう」と言い出し、何人もが「16日にこども園に来てください」と手紙を書く。書いた手紙をどうしようか考えている子どもたちに保育者が「遠くの人にお手紙を届けるにはどうしたらいいかな?」と投げかけた。するとポストに入れるという事に気付き、ダンボールを使ってポストを作り始めた。C 児「段ボールを赤くして穴をあけたらいいよ」D 児「郵便のマークは僕が書くわ」と相談し、完成したポストには次々と手紙が投函された。すると E 児が「僕、郵便配達のパイクつくるわ」と段ボールを使い乗る場所と手紙を置くスペースを作り始め、F 児も「パイクも赤だよ」とクレパスを持ってきて塗り始めた。遊びの振り返りでポストやパイクを紹介しサンタさんへの手紙は職員室で預かってもらえるようになったことを伝えると郵便屋さんごっこへと繋がっていった。また保育者が実際の葉書を見せ、郵便を出すにはどんなことが必要か考える時間を持つことで、あて先や住所・切手などに興味を持ち、いろいろな切手を作って、郵便局ごっこを楽しむ姿も見られるようになった。

〈反省・評価〉

- 芋ハンコを押した紙を便箋に見立てたことで、お手紙ごっこへ広がりを見せた。また、クリスマスをきっかけに遠くへ手紙を届けることとなり、保育者がどうしたらいいか投げかけたことで、ポストや郵便パイクへの興味を広げ、遊びを工夫する姿が見られるようになった。切手を見たことのない子どもや手紙を投函したことのない子どももいたが、友達の話の聞いたり保育者の実際の葉書を見たりしてイメージを膨らませたことで遊びを広げ、手紙を書く人、切手を売る人、配達する人など自分がしたい役割を楽しんで遊びを進める姿へとつながった。
 - 5 歳児は文字への興味や働く人への関心が広がりつつあり、それを遊びに取り入れ環境を工夫することで、幼児の興味を深め幼児たちなりに工夫し遊びたいという姿に繋がった。

5. 研究の成果

- 乳児においては、保育者との信頼関係のもと、ふれあい遊びや感触遊びをしたり、さまざまな自然に触れたりする中で「もっとやってみたい」と意欲や物への興味が生まれた。また、色々な発見や気づいたことをそれぞれの年齢で遊びを通してしぐさや言葉で表現することが出来た。
- 幼児においては、子どもが遊びこむためには、何に夢中になっているのか、その時に興味をもったことや発言など、あらゆる子どもの姿を丁寧に見とることの大切さを学んだ。また、そこからタイミングのよい声掛け・物や人との関わりといった環境を整えることの難しさや子どもが自ら準備を行っていくことで遊びが広がっていくことも学んだ。各年齢での遊びを日々の中で話し合い、明日につながるように意見をもらうことで新たな展開ができ、異年齢での姿を共有することもできた。3 歳だけの遊びの空間にしていくことで、夢中になって遊びこむ姿があった。安心して遊ぶことから少しずつ異年齢の遊びにも興味を持つようになり、4・5 歳が近くでコーナー遊びを展開することで自然と入っていく姿が見られた。子ども同士の関りや遊びを知ることもでき、そこから自分たちでも遊ぼうとすることに繋がっていった。
- 0 歳から就学まで子どもの発達を捉え連続した教育・保育をするため園内公開保育や人事交流を行った。その中で子どもを中心にして教育・保育について話すことで、乳・幼児棟のしくみも含め、少しずつ教育・保育の共通理解ができた。

6. 今後の課題

- 0～5 歳の豊かな感性を育むためには保育者の感性や子どもたちへの保育者の関わりが必要である。保育者自身が感性を磨き、優れた人的環境となるように務めたい。
- 子どもたちが遊びこむためには、それぞれの年齢・時期・子どもの興味を見逃さずに素材や道具などの教材を整えておくことが必要である。今後も年齢に合った環境を追求し、子どもの主体的な遊びが高まるよう保育内容の充実を図り、環境構成と援助について連携をとり園全体で探っていきたい。